

浄

monthly JODO

土

2014
November

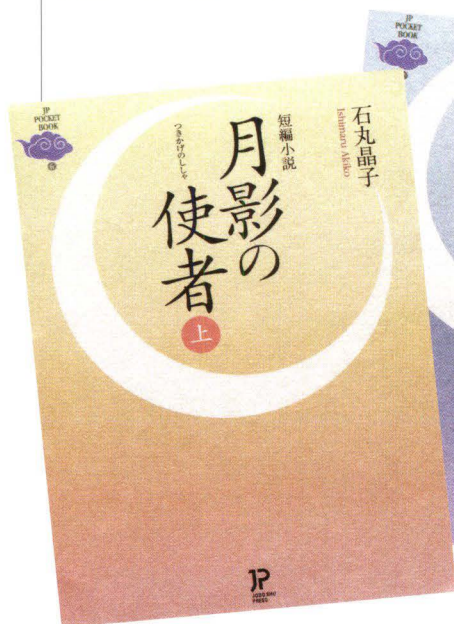
11



石丸晶子先生の

本誌連載小説『法然上人を巡る人々』が
文庫本となりました。

ほとけの
慈悲は
いつの世にも、
誰のもとにも



法然。その光に出逢い、闇をこえ、
“あたらしいのち”に生きた
貴族、武士、庶民たちの物語

月影の使者 上 下

●浄土宗出版 上下巻とも本体730円＋税

【問合せ・お求め】 浄土宗出版

〒105-0011東京都港区芝公園4-7-4

TEL:03-3436-3700 FAX:03-5472-4878 <http://press.jodo.or.jp/>

浄土

2014/11月号 目次

連載	法然上人のお言葉⑦	梶村 昇	英訳 河西良治	2
講演概録	仏教の基本思想(二)		佐々木閑	4
連載	会いたい人 桐竹勘十郎さん①		関 容子	12
連載	響流十方		袖山榮輝	22
連載	蓮門句会(晩秋)			26
連載	友好の絆		森 清鑑	28
連載小説	渡辺海旭		前田和男	34
連載	誌上句会	選者=	増田河郎子	44
連載	マンガ さっちゃんはネッ		かまちよろう	47
編集後記				48

表紙・【花写】芝崎純子 陶芸家 浅井竜介 撮影 keizo.S

背表紙裏=泰雲の美味探訪



表紙題字=中村康隆元浄土門主

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

法然上人のお言葉

ご法語

念仏申さん者は、只生まれつきのままにて申すべし。善人は善人ながら、悪人は悪人ながら、本のままにて申すべし。

(醍醐本『法然上人伝記』)

現代語訳―念仏を称える人は、ただ生まれつきのままで称えなさい。善人は善人のまま、悪人は悪人のまま、本来の自分のままで称えなさい。

Honen Shonin's Sayings

Those who utter the nembutsu should do so just as they really are, i.e., in their natural ways: if they are good, utter the nembutsu as they are good, and, if bad, as they are bad. (from *Daigo Version of the Biography of Honen Shonin*)

上人はよく「あるがまま」ということを申します。「人の振り見てわが振り直せ」という諺もありますが、いくら外面は直せても、やはりA君はどこまでもA君で、それ以外のものにはなれません。三角の魂は三角のままで円くなれ、と昔よく聞かされましたが、「あるがまま」でいくほかないということでしょう。親鸞聖人が86歳の時に書いた「自然法爾のこと」は、聖人の最後に到り着いた境地といわれますが、この650字ほどの短い言葉の中に「そう聞きました」という言葉が三回も出てきます。法然上人から聞いたというのでしようが、年老いた親鸞聖人の胸中に飛来したのは、「ありのまま」でいくほかないということだったのではないのでしょうか。

Commentary

Honen Shonin mentioned "as things really are" over and over again. There is a proverb, "Correct your conduct in the light of those of others", but, however Mr. A may correct his superficial features, he cannot transform himself into other persons, that is, he is as he originally is. Once it was often pointed out to me that a triangle had to become a circle as it was, i.e., without changing its characteristic. This advice is supposed to have meant that you can never behave just like others, that is, you cannot help conducting just as you really are. Shinran Shonin, Honen's disciple and the founder of the True Pure Land sect of Buddhism, when he was eighty six years of age, wrote on "Jinen honi", literally, as things really are according to the law of nature, which is said to have been the stage which Shinran finally reached. In this short document of some six hundred and fifty characters, Shinran wrote "I heard so" three times. This means, I think, that Shinran heard such expressions as "as things really are" from Honen. What floated through old Shinran's mind on such an occasion might have been that we could do nothing but live as we really were.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

平成二十六年六月二十七日 法然上人鑽仰会主催講演会

仏教の 基本思想

釈尊から始まる(二)

花園大学教授

佐々木 閑



生きる苦しみは平等

そのころには、社会の中で、「それは違うのではないか」「カースト制度に基づくそのバラモン教という宗教は間違っているのではないか」という人が何人も出てきます。一人ではないです。そういう人たちは、バラモン教の教えを認めず、もっと言うと、梵天さんが世界を司っているという世界観を認めずに、それぞれが新しい宗教をつくるようになっていきました。

それぞれがつくる宗教は皆流れが違っていて、言っていることがばらばらですが、基本的なベースは同じです。それは何かというと、バラモン教を認めないということです。

カーストを認めませんから、その人たちの思想は、カーストのように生まれながらの身分で、生まれながらの資質で身分は決まらないというのが共通した考え方になっていったわけです。

では、人の価値が出自、生まれで決まらなるとすれば、人の違い、もっと言うと、幸せな人と不幸な人の違いは何が生まれ出すのかということになります。

バラモン教の人は「生まれです」と言ってしまうのですが、それが否定されるとなると、人の幸せ、不幸の区別は別のところにその原因を求めざるを得なくなります。

では、その人たちは何を原因と考えるかというと、生まれたときが全部平等だから、もし違いが出るとしたら、その違いは生まれたあとに出る。その人が生まれてから何をしたかという、つまり一人一人のやることとその人一人一人の幸せのもとになるというふうに考えざるを得ないわけです。

ですから、この時代の宗教家の人たちは、我々の幸せは皆生まれたあとに我々が行う努

力の結果だというふうに言いました。その努力のことを「シユラム」と言います。

この「シユラム」という言葉からその人たちが「シユラマナ」呼ばれる。これが日本語では「沙門」と呼ばれているのです。ですが日本では「沙門」と言ったら仏教のお坊さんという意味で使われています。

なぜか。それは二千五百年前のインドで、その反バラモン教で、「努力」というのを一番大事な目標とすると言い出した人は全部「沙門」なのですが、その「沙門」たちの教えの中で日本に伝わったのは一つしかないからです。それが仏教です。だから、日本では「沙門」といったら仏教の僧侶しか指さないわけです。

もしインドで、今でも「沙門」と言ったら、いろいろな宗教の人がそれに該当しますが、日本には仏教しか入ってきていてないので、仏教のお坊さんのことを「沙門」と呼ぶようになっていくわけです。

「仏教も沙門だ」ということは、仏教はこの「梵天が世界を司っている」という、世界観を認めない教えであるということです。

そして当然、その梵天をもとにして生まれた人間の差別、生まれながらの違いというものは一切認めていない宗教だということは、これで確定をするわけです。

ですから、仏教は人が生まれたときには全部平等だとまず考えるということであって、こうして仏教が生まれてきた元の理由がわかり、もとの世界がわかると、仏教という宗教もわかっていくということになります。

もう一度まとめて言いますと、まず、この世を司っている梵天のような特別な神様はいないのだということが一つ、それから、この世界の中で生まれてくる我々はすべて生まれながらにして平等であるというのが一つ、これが基本中の基本です。

その我々がその中で幸せをつかむためにはどうすればいいのか。それは外側の血筋や家系に頼っても、何もならないのであって、生まれたあとにその人が自分で何をするかということが大事だということです。こういう要素が見えてくるわけです。

次に、釈迦という人はそういった流れの中で仏教をつくったわけですから、もちろん、その方針に従っていたということは間違いないわけです。

それで一つ考えてほしいのですが、釈迦は「人間はすべて平等」だと考えていたということです。実は「私たちは皆平等なのだから幸せなのだ」ということには、ならないということが大事です。

つまり、平等主義というのは、皆が平等であるということです。皆が平等になると考えることは、差別があると考ええる世界よりはましだということなのです。

しかし、皆が平等であればそれだけで皆が幸せに平等なのかというと、全然そんなことはありません。そこで、釈迦はどう考えたのかというと、全く反対のことを考えました。

釈迦は、我々はすべて平等に不幸だと言ったのです。カースト制を否定しますと、全部平等です。だから、皆我々は、バラモンと同じように幸せなのだというのは、「平等幸せ論」です。

しかし、釈迦が言ったのはそうではない。カーストなんかありませんが、人間は平等に最低に不幸だということです。これが仏教の平等論なのです。

なぜそうなのか。先ほど生物の系統樹の話をしました。それは我々が生きている生き物であるから、生物であるからです。

生物と生物でないものとの違いは何かというと、生物というのは死ぬということです。無生物は死なない。私たちは生きていると皆言っていますが、生きているという言葉に裏

返して言えば、死につつあるということですから、死ぬ道を我々は歩んでいるわけです。

我々は生き物であるということは、我々は必ず次第に衰退して、そして最後に死を迎えるという運命をたどっていくということと全く同じ意味です。我々が生きているというのは、そういう意味なのです。

では、それは幸せなのかという話で、私たちは多分石よりも不幸だということです。もちろん、石は自分では何も考えていないわけですが、我々人間は少なくとも石よりは不幸です。

では、顕微鏡の中で動いているゾウリムシと我々人間様とはどっちが幸せなのかというと、一応ゾウリムシの気持ちになって言いますと、ゾウリムシの私としましては、毎日目の前にあるえさを食べて、えさがないときにはじつとして、また目の前にえさが来たらパクツと食べて、時々細胞分裂をして、そして知らないうちに、あるとき死にます。

しかし、この人生、というか“虫生”の中では、ゾウリムシは自分の死を自覚していないということです。

ところが、生命体の中で自分の死をあらかじめ予測して、自覚して、そしてそれを自分の運命として引き受けなければならないという生物は、世界に一種類しかない。それはホモサピエンスだけです。

なぜかというと、頭がいいからです。非常に立派な頭脳を持っておりまして、これが論理思考あるいは推論というものをきちんと行う能力を持っているのです。だから人間はほかの生物よりもはるかに強いのです。

なぜ負けないのかといったら、それは将来を予測して、それに対して対処する能力があるから、ほかの動物が何も考えないで動いているのを全部キャッチしてしまうからです。

しかし、よかった、よかった、人間様は偉いんだと思っっているかもしれませんが、その予測能力によって我々が一番理解をしてしまう恐ろしい事実とは、自分が死ぬということです。

しかも、死ぬ時期まで予測できます。百年ぐらいが限度で、絶対百五十年にはならない。その理由はなぜかという、百五十年生きる人はいないからです。私はひょっとしたら例外かもしれない、私だけは百五十年生きるかもしれない、三百年かもしれない。私はあと二百年ぐらい生きますということは絶対に思えない。

なぜかという、ひいおじさんやひいおばあさん、ひいひいおじさんやひいひいおばあさん、皆死んでいます。周りに百五十年生きている人はだれもいません。もし人間に例外がいて、死なない人間がいるとするならば、その人はどこかにいるはずなのだけれども、どこを探してもいない。

そしてもう一つ、それは自分の体に変化が起こるからです。自分の体が十年ごとに見ても、確実に年老いて老化していくことがわかる。もし私が、二十年、三十年たっても何も変わらなければ、私だけは違うのじゃないかと思うかもしれませんが、間違いなく老化しています。

こういうふうなさまざまな状況証拠を積み重ねる中で、我々は自分が絶対死ぬということに自覚して生きております。これは人間だけなのではないかと私は思うのです。

そして、死んだときに、すべての人生の持ち物や自分というものの、自分の所有物を全部手放して、「私は一体どこにいくのか」という不安になるのです。こういった確信が私たちの根底に、いつもは忘れていられるけれども、心の底にあって、苦しむのです。

ですから、お釈迦様がおっしゃっているのは、我々は、カーストが上だろうが下だろう

が、王様だろうが貧乏人だろうが、生き物として生きているこの苦しみは、全部平等なのだとすることで、これが仏教の平等主義です。

これは非常に重い概念で、ただ単に、お金がなくて困っているというような話ではなく、どんな人間にも必ずついて回り、絶対に逃げるのができない苦しみがあるということ、これが仏教の平等主義というわけです。

ですから、こういう平等主義の前では、バラモン教のこのカースト制度などというのは吹っ飛んでしまいます。こうして釈迦が見た世界観というのは、苦しみで満ちていて、悲観的な世界なのです。

そして、そのまま「そうです」と言ってしまう、もうあとは絶望するだけです。人間が生きていく力はないわけです。

私たちはそういうことを皆知っています。ここにおられる方は全員、私たち人間は不幸だということを知っていますが、その割に結構のんきな方もおられます。

それはなぜかというと我々の脳は死に行く自分のことを忘れるということができません。おいしいご飯が目の前にあれば、自分がいずれ死ぬということは忘れてしまいます。もしこの能力がなかったら、人間はたちまちにして全員絶望して死んでいます。

認知症は悪いというけれども、認知症には認知症の役割もあります。自分の寿命がだんだん縮んでいく様子を見なければならぬ老人の時代において、認知症はそれを救ってくれるという考え方があります。

我々は目の小さなことで大きな苦しみを忘れるように脳が働いてくれるのです。そのおかげで何とか生きていくことができるというわけです。

だから、このバランスが崩れると、例えば、うつ病になります。うつ病になりますと、

これは私の考えですから、医学的な根拠で言っているのではないですが、日々の小さな事柄で自分の心の苦しみが消せなくなってくる。そういう能力が役に立たなくなってくる。

そうすると、我々の本当の生きる苦しみが表に出てきてしまう。これが私は一種のうつ病の人たちの姿であろうと思っています。私も昔実はちょっとうつ病になったことがあります。

だから、死ぬまで忘却して、ずっと忘れているならいいのです。毎日おいしいものを食べることを考えて、そして、ある日ぼっくり逝ったら、それは幸せです。

しかし、人はそうはいかない。なぜならば、次第に寿命が縮んでいくことが自分でわかるし、次第に老化している自分の姿を見なければならぬからです。

そうすると、だんだん心の底から、若いときに隠しておいた生きる苦しみがだんだん表にあらわれてくるのです。それが年をとればとるほど、我々が生病老死というものの苦しみにさいなまれていくということです。

もちろん、これは人によって違いがあります。死ぬまで幸せに生きる人もいるでしょう。しかし、多くの人たちはやがて年をとっていく中でだんだん悟っていくわけです。

お釈迦様はこの感覚が人並みはずれて優れていたのです。だから、十歳、二十歳のころに既にそれを感じたのだと思います。私たちならば、八十、九十、百になったときにそれを感じるのかもしれませんが。お釈迦様は早めに感じて、その苦しみを逃れる道があるかと考えて、見出してくれたのが仏教という宗教です。

(つづく)

連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

文楽人形遣いで、登場の瞬間に客席から決まって拍手が起くるのは、人間国宝の吉田簀助、その高弟の桐竹勘十郎、そして来年玉男襲名が決まっている吉田玉女たまめくらいだろう。

この拍手、観客が日ごろその技わざのみごとさを感じ入つての信用なのは勿論だが、人形を構えた姿の美しさと、その人間性、ふとした動きに現れる品格と、そこに自然とにじみ出る色気とを敏感に受け留めるからなのだろう。それが人気というものらしい。

勘十郎さんが言う。

『品と色気は売ってない』と言われていますよね。どっかに売ってへんかなあ、お金で買えるものなら買いに行きたい、つて自分らではよう言うてます。似た言葉で『花がある』というのも、品と色気のことでしょうね。つまりはこれも買えません。

亡くなった玉男師匠が立役を遣っている、と、ああ、男の色気があるなあ、と思つたし、うちの簀助師匠が女方を遣うと、ただ出てる

だけで香気と光を放つように見えてしまう。じつとしてるだけでそこに何か輝くものが出るんですね。お客様から、簀助師匠の遣っている人形だけにスポットライトをあてているんですか？ と聞かれることがあつて、勿論そんなことはないんですが、そういうふうに見えるつてすごいことやなあ、とつくづく思います。僕も早うそうなりたいたいと思つてました。

人形と一体化して役になり切る、と言いますけど、主遣いおもづかとして顔を出して人形を遣っている、遣うてる人形の役が怒つてるときは自分も怒つてる顔、悲しんでるときは自分も悲しんでる顔になつてしまふ。先輩から、お前、そんな顔するんやったら、人形いらんでえ、つてよう言われて（笑）、もつとボーカフエイスにならなあかん、と思つたものでした」

最近の勘十郎さんの舞台には、熟達の余裕がもたらす風格が漂い、苦み走つた男の色気

文楽の人形は、首と右手を操作する主遣い、
左手を操作する左遣い、脚を操作する足遣い
で動かされている



が感じられる。

ところでこの九月、シェイクスピアの『ヘンリー四世』と『ウインザーの陽気な女房たち』を文楽にアレンジした『不破留寿之太夫』が上演されたが、これは全員が頭巾をかぶった黒衣姿だった。新作の場合、たとえば数年前に大阪で観た『夫婦善哉』のときも最終幕まで人形遣いが顔を出さず、このほうが気が散らないでドラマに打ちこめていい、とするお客と、やはり顔が見えないと物足りなくて欲求不満になる、というお客が半々のようなった。私は後者。

かなり前の話になるがザルツブルグの操り人形劇『ドン・ジョヴァンニ』を観たときに、

最初のうちこそ人形自体があまりに精巧にできていて引きつけられたが、音はオペラのテンプだし、それぞれの人形の動きに遣い手の個性が感じられず、途中で飽きてきてしまった。そこへ行くと文楽は大夫・三味線・人形の三業がナマでしのぎを削り合うところがすごいし、なんともぜいたく。

それで『不破留寿之太夫』。

まず豊竹英^{はなや}大夫^{だゆう}以下のとぼけた味の掛け合いの語り口が洒落て面白かった。また作曲の鶴沢清治が指揮者のように指示を与える三味線の演奏が素晴らしかった。最初にいつも聴き慣れないスーツというセロのような静かな音が流れたときは不意を突かれてゾクゾクと鳥肌の立つ感動を覚えた。一人が太^{ふと}棹^{ざお}の文楽三味線を胡弓のように立てて構え、弓で演奏するのだが、胡弓よりも深い精神性を湛えた不思議な音色に、すっかり心奪われた。

そして肝心の勘十郎さんの遣う不破留寿之太夫。シェイクスピア劇のフォルスタッフは

大酒飲みの太つちよで、好色で、なぜか自信たつぷりで、人妻二人に同じ文面の恋文を送りつけて失敗し、大恥をかいたりする。文楽の不破留寿も同様だが、主君の春若から所払いにされて呆然となりながらも、「名誉とは何じゃ、言葉じゃ、言葉は空気じゃ、空しいものじゃ」とうそぶき、名誉のためにあくせくせずに愉快に楽しく生きていこう、と自らを励まし、意気揚々と客席に降りてきて左右のお客に愛嬌を振りまきながら後方の扉に消えてゆく。そのときの伴奏が先ほどの太棹胡弓の奏するイングランド民謡の「グリーン・スリープス」の一部を取り入れた曲で、その哀調と、勘十郎さんの不破留寿人形の派手な動きとのミスマッチが強く心にしみて、客席にいつもと異なる興奮が湧き起った。

私は黒衣の中の勘十郎さんが懸命に内心の得意をかくしてポーカーフエイスを装う顔を客席で想像しながら、それを目にする事ができず、何とももどかしい感じがしたものだ

『女殺油地獄』で与兵衛を遣う勘十郎さん



った。

「まあ、出遣いを好まれるお客さんのほうが多いかもしれませんけども、今度の不破留寿の人形はあの太鼓腹でとりわけ大きいですからね、引っこみで客席を歩くときはもうクタクタ（笑）、ひどい顔になってると思いますからちようどよかつたんですわ。

それにしても清治兄さんのあの曲、よかつたでしたでしょう。あの楽器は三味線の裏の皮に線香の火をあててまあく穴をあけたもので、それを弓で演奏するとあないなきれいな音色になるんです。終りの段切れの曲は聴いてうっとりさせられますわ」

文楽が西洋ものを取り上げた例は今回が初めてではない。最初は昭和三十一年の『お蝶夫人』で、私はそれを観ている。青い眼のピンカートンと可愛い蝶々さんが抱き合って口づけをするところでは、客席の母も私も本当にびつくりした。続いて『ハムレット』『椿姫』が上演され、平成二年『石の花』、同四

年『天変斯止嵐后晴』と続く。私は平成二十一年の『天変斯止』の再演を観たが、舞台美術の素晴らしさ、構成の確かさ、終幕へ向けての収斂のさせ方のみごとさと、その豊かな音楽性において、『不破留寿』はより素敵な作品に仕上がったと思う。

「これをシェイクスピアの国イギリスで上演したいものですな。どんな顔して観てくださるか楽しみです」

旅公演とその国のおいしいワインと、それにも増して文楽を心から愛する勘十郎さんは、九月の東京公演を終えてすぐ、スイス公演へと旅立つて行った。演目はお里沢市の夫婦愛の物語『壺坂靈験記』と勘十郎さんの十八番で八重垣姫に狐が乗り移る『十種香』の奥庭狐火の段。そして、清姫が安珍を追う『日高川入相花王』。

勘十郎さんは昭和二十八年三月、二代目桐竹勘十郎の長男として大阪で生まれた。

勘十郎さんが小学校6年生の時に描いた師匠の吉田蓑助さん



月足らずの超未熟児で、生まれたときは呼吸をしていなかったという。

「産院の先生が足を持つてぶら下げて振ったら、初めて産声をあげたそうです。それで、私がこの世に生まれて父よりも早く対面したのがうちの簀助師匠だったというのも、ものすごい因縁を感じますね。師匠は当時十九歳で、舞台で手の離せない父に言われて様子を眼に駆けつけてくれたんですけど、産院に着いて、ここやと言われても私が見当らない。よくよく見たら新生児用の寝床の四隅に置かれた湯たんぼのかげに、小さい小さい私がいいた。『お前、ほんまに小さかつてんでえ、自分で覚えてへんやろけどな』って（笑）、当り前ですわ。『指なんかマツチ棒くらいやつたんやで』って言われますけど、まさか、中に骨もありますし、いくら何でももうちよとは太かったらうと思いますけど、そんなことから私は師匠をずっと簀助兄ちゃんと呼んで育ちました。私が小学六年生のときに描い

た『簀助兄ちゃん』の絵が今もあります、師匠が『二人禿』ににんがしを遣っているところです。

私は絵を描くことが大好きで、小学生のころは将来漫画家になりたい、と思ってました」

勘十郎さんが幼いころは、文楽が三和会と因会よなかいに分裂していて、父二代目勘十郎は三和会に属していた。

「当時、文楽は隆盛とは言えずに貧しい生活だったようですが、それでも私と二つ上の姉（女優の三林京子）とはまあ不自由なく育ててもらいました。母は、この子は絶対に人形遣いにはさせんとこ、と思つたそうで、なるんやったら三味線弾きに、と言つてました。三味線弾きなら人に教えられるし、踊りの会にも頼まれますから。」

それで、父が大阪の公演のとき、母はお客様との応対に劇場へ出かけなくては行けないのですが、子供二人を家に残しては行けないので、ちよこちよこ一緒に連れていってもらつて、私は楽屋で遊んだり、客席を走りまわ

つて叱られたりしてました。そのころの道頓堀の文楽座には二階席があつていつもガラガラでしたんで、そこが私の格好の遊び場で、赤い手摺におもちゃの自動車を走らせたりしてました。舞台では山城少掾をはじめとして、吉田文五郎師匠とか、錚々たる方々が熱演しておられるのですよ（笑）。おい、あれ、誰の子おや、勘十郎はんとこの子おやがな、また来てんのかいな、つて感じだったと思いますわ」

そのうち、小学校入学となる。

「先生から、お父さん何してますか？」と訊かれて、親の職業調査ですね。あの、なんか人形をこないして持つて、一緒に踊ってます、なんて（笑）。よっぽどアホやったんですね。学校ではいじめられっぱなしで、勉強が嫌いで学校へ行くのがいやでした」

姉上の三林京子さんに、明治座の楽屋で当時の勘十郎さんのことを伺うことができた。「だって、いじめられる要素が揃ってました

もの。小さいし、気は弱いし、右の頬に大きな黒子はあるし、ですから。いつもかばってましたけど、私が卒業して弟が六年生になったら、いっぺんにいじめが集中したそうです。でも勉強は嫌いだったけど、IQは学年で一番でしたから、元々頭はよかつたんですね」

勘十郎さんが笑つて言う。

「兄ちゃんみたいな姉ちゃんでしたからね。とっても強い（笑）。ほんと妹がほしかつたんですが、ちばてつやさんの漫画『ユキの太陽』のユキみたいなね。それで私が結婚して娘が生まれたら、さっそく友紀という名前をつけました」

（この項つづく）

大阪住吉にある自宅の庭にて。勘十郎さんが小学校2、3年生の頃。左は姉の三林京子さん



人、至心あつて、精進に道を求めて止まらずんば、かなら会ずまさに剋果すべし。何れの願か得ざらんと。ここにおいて世自在王仏、すなわち為に広く二百一十億の諸仏刹土の天人の善惡、麗妙を説いて、その心願に応じてこれを与えたまう。

【無量寿經】卷上より

人が嘘偽りのない心を懷き果敢に覺りを求めてとどまることがなければ、いつか必ず成し遂げるのである。いかなる願いであつても叶わぬものがあるうか。

〔法藏菩薩にそう説き示した〕世自在王仏はただちに法藏菩薩のために二百一十億ものみ仏の国土について、そこに住む天人や人々の行いの善し惡し、また粗惡な国土と精妙な国土を余すことなく説き、法藏菩薩の願いのままにそれら一つ一つをすべて現し出してお示しになった。

（浄土宗総合研究所編訳『現代語訳 浄土三部經』参照）

こののはじまり

この頃、夢を見た。たくさんのお坊さんがいた。若い人が多かった。広い会議室のように見えた。何の集まりだろうかと思った。ほどなく「そろそろお願います」という展開になった。「えっ、オレの出演？」と戸惑った。

「何をやればいいの?」「いやだな、今日はご法語の勉強会ですよ」「そうか、それなら資料を作っておいたはず。何とかなる」

誰と会話しているのか、はたまた自問自答なのか、夢だからよく分からない。でも、ともかく勉強会の講師なのだ。その夢は私に都合よく場面展開した。気がつくとかバンを持っている。きっと、そのなかに資料が入っているはず。さっそく、私はそのなかをかき回してみた。ところが、その夢はすぐに意地悪になった。肝心の資料が見つからないのだ。現実と夢が交差したのだろうか、「そうだ、オレまだ資料なんか作ってない。作っておいだなんて勘違いだった」と気が付いた。夢のなかで急に私は焦り始めた。そして、その夢は打ち切られた。

現実味のある夢だった。じつは地元長野で数年前から、法然上人の御法語を読んでもみようという月例の勉強会が開催されている。場所は善光寺大本願。大本願を拠点に活動する浄土宗僧侶の集まり道心会（創立五十年を越える道心会

のことは、またいつか話そう」の一事業だ。もともとは会の名誉会長であった故服部英淳勸学が浄土教学を講義されていた。勉強会の長い歴史のなかで、私が講師をつとめることになったのは、浄土宗総合研究所で『法然上人のご法語』の編訳作業に携わっていたからだ。会の先輩から、携わった者の責務であると論された。

思い起こせば、私はほんの偶然から研究所に入った。平成二年の四月。後輩の結婚式に出席するため私は名古屋駅を降りた。駅のタクシー乗り場で、同じ結婚式に招かれた、長野出身のとある先生と出会い「久しぶりですね、今、どうしてますか」と尋ねられた。前年の春に大正大学の大学院を終え、長野の寺に住みだしたものの、前述の道心会やら地元仏教会に顔を出すほかは、数件の月参りという生活。この先、どういう生き方になるのか、正直、自分の軸足が分からなかった。だから「ひまです」と答えた。すると、その先生、「来週、浄土宗に新しい研究所が発足するんだが、君、来ないか？」と声をかけてくださった。

学生時代、仏教学や古代インド哲学には親しんできたものの、浄土学は専門外。そんな私が研究所に入り、法然上人のご法語や浄土三部経の編訳に携わる

ようになったのは、そのお声かけがあつてのこと。二十年近くここで文章を書いていけるのも、長野でのご法語勉強会の開催も、ことのはじまりは、まさに、その先生の一言なのである。私のスタートラインだった。

ところで、阿弥陀仏にもことのはじまりがあつた。そもそも阿弥陀仏はある国の王だった。その国王が世自在王仏と出会ひ、説法を聞き、感銘し、ともかく衆生を救わんがために自分も仏となり浄土を建立しようと思ひ立った。でも、どんな浄土を建立すればいいのか、そこが分からない。だから世自在王仏に教えを請うた。世自在王仏は「いかなる願ひであろうとも叶わぬものがあるうか」と国王を励まし、二百一十億の浄土を国王に見せしめ、極楽建立、成仏へと導いた。ことのはじまりがあつて、物語がある。わたしたちが極楽往生を願つてお念仏を称えるというのも、阿弥陀仏にちなんだ、まだまだ続く物語の一部なのかも知れない。そう、長い長い物語の一場面なのだ。

そうだ、まだ話していなかった。「君、来ないか？」と私に声をかけて下さったのは、のちの大本山光明寺の御法主で先ごろ御遷化せんげされた宮林昭彦台下であつた。さて、今月の勉強会はいつだったつけ。長い物語の一場面だ。正夢にならないよう、しっかり準備しておこう。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

蓮

門

句

会

勝崎裕彦

(東京新宿・香蓮寺)

弥陀さまと手を取り合える善の綱

止悪修善自浄其意の十夜寺

ふと見れば小菊一輪慈悲の笑み

山崎龍道

(熊本天草・遣迎寺)

懇ろに拝す御法語十夜ねんごかな

十夜僧深き一礼堂に入る

遮断機の上がりて揺るる野菊かな

テーマ 《晩秋》

行正明弘

（福岡糸島・正覚寺）

菊の袈裟着て人形の和尚ぶり
菊活ける母に卒寿の矜持の背
残菊の奔放赦し置く住持

佐山哲郎

（東京根岸・西念寺）

猫と僧むくりこくりの菊日和
秋落暉バス停の名は阿弥陀堂
遺影用写真撮りつこする花野

御宿とメキシコを結びつけたもの

友好の絆

第六回

森清鑑

ロドリゴ江戸へ行く

大多喜から江戸までの距離は約六十キロ。

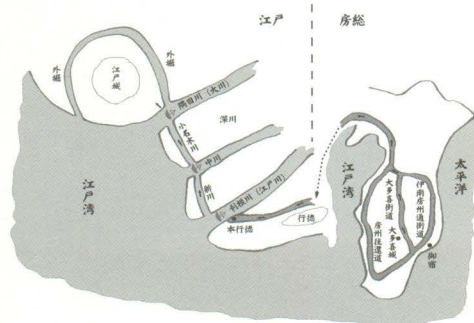
長丁場である。ロドリゴは大多喜の殿、本多忠朝から譲り受けた馬に跨^{また}がる。忠朝と彼の有力な家臣の温かな見送りを受けて、江戸へと旅立つ。ロドリゴ、部下のアントン、難破船に同乗していた日本人の通訳。忠朝の家来が先導役に立っている。また各馬の手綱も家来が曳^ひいている。至れり尽くせり。江戸の將軍秀忠との謁見^{えっけん}に向かう。ロドリゴの胸には、御宿での悲惨な遭難からこの日の出来事が去来する。何という幸運。これは夢か。領主本多忠朝の励ましの声を受け、城下町通りを出発。沿道には、大勢のスペイン人、大多喜の家臣、町民が総出で見送っている。左に、四つ門通りを見て、大多喜街道を北上。

ここで、ロドリゴ一行の江戸までの行路を類推してみる。まず、大多喜街道をまっすぐ北上。相当の距離があるが、やがて伊南房州

通街道と交差。この街道を左に曲がる。この古街道は、房総の太平洋側をなめ、ほぼ中央から江戸湾の方向に転じている。江戸湾に近づくと、今度は湾沿いに半島の西側を管める房州往還道^{おうかん}に出る。この道は江戸湾をぐるりと廻っている。やがて枝分かれた道が利根川河口（江戸川）行徳に繋がる。本行徳から利根川を渡る。そして新川へ。すると今度は中川に出る。ここから小

名木川を通り隅田川へ。新川も小名木川も、江戸湾沿いに家康が最初に開発した運河。豊かな房総の実りを江戸に運ぶ。特に行徳の塩田は有名であった。小名木川の両岸には、柳や松が植えられ、ロドリゴはこの優雅な自然美を堪能したと思われる。そして大川（隅田川）

ロドリゴ江戸への想像ルート



から江戸の中心街に入る。恐らく、日本橋川を行つたと思われる。ロドリゴは、船上から見る、江戸橋、日本橋あたりの、活気に満ちた江戸の家並みに目を見張つた事であらう。江戸城の大神守が見える。

ロドリゴは、江戸に入るまでの道中、「どこへ行つてもイスパニア国王の使者として優遇され、大切に持てなされ、歓迎された」と記している。彼は、村の広さと人々が多いことに驚き、歓迎されている。しかし、江戸の中核に入つてからの歓迎振りには、声を呑む。到着すると、まず格の高い、大勢の武士が彼等を出迎えたのである。

江戸の開発

ここで、ロドリゴが目にした一六一〇年の江戸を彷彿とさせるために、家康の大開発の流れを簡単に記述したい。家康の江戸入府は、一五九〇年。当時の江戸は粗末な湾沿いに開けた、いわば自然優美な原野であつた。幾つ

もの大河が湾に注ぎ、州を形成していた。

家康の構想は、全国から人々を集め、一大城郭都市を造ることにあつた。それには、食の確保が重要。そこで、まず、とてつもなく豊かな房総の農産物を運ぶ運河の建設に着手する。小名木川、新川。すぐ傍まで湾の波が押し寄せている。同時に、南北に江戸湾に注ぐ平川、隅田川、中川、利根川（江戸川）の一級河川の洪水を防ぐ、多数の運河の掘削に着手。江戸城近くの平川の流れを変え、道三堀、日本橋川を造る。

次に、江戸を囲む、神田山、四谷紅葉山、霞ヶ関といった台地を削り、一大埋め立て工事に着手。日比谷入り江（海）を埋め立て、江戸前島（東京駅から新橋に至る島）と繋げ、家臣、町民が住む、広大な平地を造成。そして順次、江戸湾の埋め立てを進めていった。全国から人が集まり、江戸っ子になっていく。そして大きな町の建設が始まる。広大な江戸城郭の周囲には、武士の館。その外側に向

いており、古代ローマの政治と競えるほどだ。「家の外観は見劣りするが、内部の美しさは我が国よりはるかに素晴らしい」。

「町には門（木戸）があり、職業によって区画整理されており、ある職業地区には、他の職業の人は住んでいない。町ごとに靴工（履物職人）あり、鉄工（鍛冶屋）あり、縫い工（仕立て屋）あり、商家あり……です」。「商家も同じく銀商で一区画、金商、絹商と別々に住み分け、雑居していることはない」。「江戸の町は海に面しているので海産物に恵まれている」。「特に、魚市場（日本橋魚河岸）という一区画があるそうなので案内して頂いたが、ここには海と川の実に豊富な鮮魚、干魚が蓮台に並べられ、魚売り、町民、武士で賑わっている。また、見たこともない大きな生け簀があり、満々と水が張られ、生魚が売られている」。「青物、果物商もそれぞれ区画があり、豊富な種類が大量に置いてあり、清潔できちんとして陳列され、買う気持ちをそそら

る。果物は世界中でも最良の味といえる」。「馬の売買を専門とする馬喰町もあって、馬の数が多いので迷ってしまうほどだ」。「宿屋だけの旅籠街は幾つもある」。「遊女がいる場所は、常にまちはずれ」。

江戸城で将軍と会見

江戸に着いたその日の夕刻に、ロドリゴ一行は、将軍が指定した宿に落ち着く。そこで



も「大勢の町民が出迎えてくれ、広い町の通りも群衆で一杯。交通整理の人達がでるほどだった」と記す。「私たちの評判は、町中に広がっており、家来や町民まで宿に訪ねてくるので、將軍の側近に頼み、宿の門に衛兵を立ててもらい、私の許可を得ない者は入れないという札を掲げてもらうほどでした」。

宿について二日後、將軍からの使いが二度も来てくれ、「我が手に接吻するを得べし（謁見する）」と伝えてくる。その日の夕刻、ロドリゴ達は、江戸城に向かう。

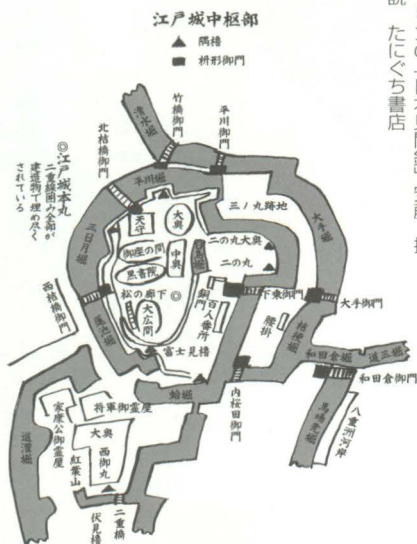
江戸城へ

ロドリゴの眼前に城壁が聳^{そび}えている。滔々^{とうとう}と流れる大手堀を渡る。すると絢爛豪華^{けんらんこうか}な大手御門。その堅固さ。厚い門が開かれ、中に入る。そこには銃を持った千人もの侍が二列に並んでいる。しばらく歩くとまた堀があり（内内堀）橋を渡ると下乗御門（大名もここで馬を下りる）。潜^{ひそ}って、中に入ると、槍を

手にした約四百人の武士。左手の百人番所の前を通る。周囲の城壁は一段と高く聳^{そび}えている。最後の門を潜^{ひそ}ると、約三百人の槍や刀を携えた武士の一人を見る。「武士達はそれぞれの持ち場で忠実に任務しており、遊びがない」。そしていよいよ大広間に入る。ロドリゴは「江戸城の建造物と武士の数、その強大な様子はとても言葉に表現できない」と記している。

（つづく）

【参考文献】
ドン・ロドリゴの「日本見聞録」安藤 操
意訳、解説 たにぐち書店



小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第五十三回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

盟友・萩原雲来 その3



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は、小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才氣煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、そこで仏教に造詣が深いオーストリア人ハングリー帝国元駐日代理公使ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵と出会い大いに刺激を受ける。ストラスブルクに戻った海旭は、「半年先輩」で同じ宗門海外留学生の荻原雲来から、ヨーロッパ人の比丘であるニャーナティロカルの存在を知らされ強い興味を覚える。一方、雲来はケンブリッジ大学の蔵書目録から見つけた仏教聖典「瑜伽論」菩薩地の画期的比定を行ない、海旭にもそろそろ成果が求められていた。

「ケンブリッジの偉業」を陰で支えた海旭論文

玉石混淆の山から『瑜伽論』菩薩地の原典という「玉」を発見した荻原雲来は、英国はケンブリッジの地で年を越してようやくその写本を終えた。しかし、そこから雲来の真骨頂だった。発見しただけでも大手柄、それをこつこつ写し取るのも大奮闘なのに、ケンブリッジ大学図書館にあった漢訳の『瑜伽論』とつき合わせて、梵字（サンスクリット）本の欠損を補ったのである。これはヨーロッパの比較仏教学の碩学たちを大いに喜ばせたことこの上なかった。

こうして雲来はケンブリッジに二カ月以上も逗留した後、ロンドンでパリイ学のリス・デイヴィス、さらにその足でオランダはライデン大学で梵字学のスパイヤー博士に会って偉業を報告、ようやくストラスブルクに戻る事ができたのは三月を過ぎていた。先に渡辺海旭が雲来に話したようにロイマン教授が

学者仲間から、君のところには素晴らしい弟子がいてうらやましいと誉められて鼻高々だったと自慢したのも当然であった。

*

以上を雲来は実に嬉しそうに語り終えると、ふうーっと深いため息をついた。

海旭も改めて盟友のなした偉業をわが事のように誇らしく感じ入りながら、とんでもない考え違いをしていたのではないかとの思いが胸中に去来した。あれほど雲来は学究熱心なのになぜ『ドクトル』をとれないのかと、思っていたのはとんだ考え違いだった。逆に学究熱心が仇となつていのではないか。「木を見て森を見ない」という言葉が脳裏に浮かんだが、さすがこの言葉を朋友には使えず、あわてて打ち消したため、いつもより吃音を募らせて言った。

「お、おぬしは聖典の原文にあたるのが面白すぎてならんのだろう。さ、さらにその写本や校訂にのめりこんで論文どころではなかった。おぬしの下積みの作業のおかげで、これ

で一大論文をものせると喜んだ者もいたことだろう。おぬしとしては、他人に果実のものを口ハで提供するばかりでよいのか」

これに対して雲来の口をついて出たのは、海旭に驚きと自省を促す答えだった。

「本懐だとも。そもそも私にそうせよと命じたのは君だぞ。正確には君が留学前に発表した論文『奮つて聖典原文の研究に従事せよ』だぞ。ほら、これだ」

雲来は引き出しを開けると、日本から持参した書籍の山の中から雑誌を抜き出した。『仏教』という小冊子だった。海旭はなつかしそう手にとるとばらばらとめくった。その中に、海旭がドイツに留学する三年前の明治三十年（一八九七）二月に寄せた論文「奮つて聖典原文の研究に従事せよ」はあった。

海旭、日本仏教界を一刀両断

うっかり失念していた。そうだったのかと、海旭は、いつもながらの自分の粗忽さを恥じた。

すまん、すまんといわんばかりに頭を掻く海旭に、雲来は言った。「君の筆になるものは概して『論』というよりは『檄』の趣きがある」いっそう頭を掻く海旭に、雲来は手を振ると続けた。「いやいや、悪口を言っているのではない。だからこそ読む人を引き込む力があると言っているのだ。あれには実に刺戟を受けた」

それはこんな書き出しだった。

「曰く歴史的討究、曰く比較的考察、此等新研究の方法は、今や汪洋放肆の勢を馳りて仏界に張溢し来れり、(略)滔々たる大勢誰か得て之を壅塞することを得んや、然れども是れ唯潮勢なり」

海旭は頭を掻いた手を懷に収めると言った。

「ど、どうもわが仏教界は掛け声だおれだと、腹が立つてならなかったのだ。若気の至りとは思わん。今もその想いは変わってはおらぬ。こ、これは、わが福田行誡師が破ろうとし破れなかった日本仏教界の悪弊のなせる業にほかならぬ」

「君の慨嘆ぶりは私も同感だ。君は日本の仏教界にこう提言する」雲来は論文へ目を走らせると続けた。「いわく、支那訳の經典を以て、満足すべきの秋は既に過ぎぬ、巴利の小乗經文大に研むべし、梵文(サンスクリット)の大乗經典亦大に研むべし、西蔵(チベット)の二大蔵も討究すべし、と」

「わ、われらもその先兵の一人だが」と海旭は肩を落とした。「やはり多勢に無勢は否めぬ」

「たしかに」と雲来は頷いた。「論文で君は『眼を放つて世界の学者が如何に仏典原文の討究の其全力を傾けしやを思へ』と檄を飛ばしているが、七年前も今も彼我の差は変わってはおらぬようだ」

「そ、そのとおり」と海旭は応じた。「この論文でも記したが、わが浄土宗の原典類はマックス・ミュラー、『法華經』はビュルヌフ、ケルンら、パーリ語の『本生經』や律蔵はリス・デイヴィズやフウスベルらの西欧の学者連が先鞭を着け、西蔵(チベット)も尼波羅

(ネパール)も暹羅(シヤム)も緬甸(ビルマ)も大抵歐人の研究するところとなつて久しい」

雲来は身を乗り出した。「さて、ここからが君の真骨頂だが、君は論文で、憤怒の刀を抜き放つ。すなわち、西欧学者に名を成さしめていていいのか。かつて天竺から仏典を持ち帰り翻訳をした玄奘の偉業を思わないわが日本の仏徒は何だ、と。そして、その刀でわが日本の仏教界を一刀両断にするが、君は覚えてるか」

海旭は深く頷くと一息入れた。「だ、だいぶ前なので正確には覚えておらぬが……どれ」と言つて雑誌の論文に目を通すと読み上げた。「真言宗徒には、願わくば紛々の闘争を止めて尼波羅(ネパール)の諸密教にその眼睛を転ぜよ、法華宗徒には、区々たる格言問題の甚愚なるを擲^{なげ}ちて西欧の学者たちの研究に批評を加える勇氣をもて……か。われながら、何とも手厳しい」

雲来は苦笑を浮かべた。「内政干渉といわ

れかねないぞ。その上で、なんと内輪の宗門にも注文をつけた」

「た、他宗派だけでは不公平というものだ」と海旭はその先を読んだ。「不生産的事業の忠魂堂に全力を集中する俗浄土宗徒、何ぞ其学徒を奨励して這般^{しやはん}の好問題に着手する宏量なきや、紛々たる小事業に奔走して笑を世界に取るは識者の為すべき所にあらず……」

「よくぞそこまでいったものだ」と雲来は思わず笑いを上げた。

海旭はリーゼントの髪を手でさすと言つた。「ば、僕が矛先は宗門そのものではない、あくまでも宗門に仇なす身中の虫、俗流の輩だ」

「言いつ分はわかるが」と雲来は真顔に戻つた。「それにしても大丈夫かとひやひやしたものだ。わが宗門も海外留学制度を考えているらしいと聞こえてきたときに、こんなことを言ったら、選に漏れてしまうのではないかと心配したぞ。自分で自分の道を閉ざしてしまふことになりはしないかと」

「い、いやいや」と海旭はかぶりを振った。
「言うべきことは言わなくては、腹がふくれるばかりだ」

現代の玄奘よ、出よ！

雲来は雑誌を片手にさらに身を乗り出した。
「私をいっそう鼓舞したのは、君の論文のその先だ。君は言う、西欧の学者のはるか後塵を拝してはいるが、玄妙幽玄なる大般若をはじめ彼らも手をつけてはいない未踏の領域がまだまだある。ここにこそわが国仏教研究者が分け入るべきだと。では、どこにそれはあるのか。君いわく、尼波羅（ネパール）に大般若、密嚴、十地、三昧王、楞伽、法華、如來秘密、普曜、金光の所謂九部の大乗經、悲華、賢劫、孔雀王等の顯密諸經ありて、現に英国の書庫に珍藏す、と。今回、私が『瑜伽論』菩薩地の原典を見つけることができたのも英国はケンブリッジだ。君の炯眼には恐れいるほかない。私にとって君は予言者かもしれぬ」

海旭はジョッキのビールを飲み干すと、到来物のアルザス名産白ワインへ乗り換えながら、言った。「ぼ、僕が予言者なんぞなものか。僕は貴重なる聖典の多くは英国が七つの海に翻るユニオンジャックの力をもって収集・珍藏しておるという事実を開陳したまでだ。その事実を忠実一途に追求めるおぬしのひたむきさこそ予言者のそれだ」それは海旭の本音だった。

雲来は手を左右に大きく振った。「いやいや、予言者が気に召さぬなら、こう言おう。君の論文の掉尾の庄巻に私はやられた、それが英国はケンブリッジのわが発掘劇につながったと。すなわち、奮躍一番大に大般若の原文を読み、楞伽の梵文を披き、俱舍の梵頌を研めて、真研究の基を開かざるや。マックス・ミュラー博士が『東方聖書集』を編纂したことで英語が学术界で重用されるようになったことを思うと、本邦の仏教学徒が縦横に聖典原文の討究に従事すれば、仏教研究に新境地を開くだけでなく、日本語が世界学术界

で重きをなせる。皇朝學術の爲に大氣炎を大世界上に吐くことができる。二十世紀の玄奘を我が国から輩出せしめて、皇朝仏教の爲に万丈の虹霓を吐くものはあらんことを信ず、と。これで、よし、私もやってやろう、現代の玄奘はむりだが、沙悟浄ぐらいの役には立てると思ひ立ったものだ」

海旭は真面目一途の雲来が珍しく冗談を言ったのに破顔一笑した。「な、なにを言う、おぬしは玄奘の役を立派に果たしつつある。それはロイマン先生、そしてケンブリッジのペンドール博士をはじめ彼の地の碩学連中も認めるところだ。そ、それに引きかえ僕ときたひには……」

海旭が自省に入りそうなのを察してか、雲来はそれを遮るように対話を引き取った。「先程、君は他人に口ハで果実のもとを提供するばかりだと言ったが、私はそれを無念とは露も思わぬ、むしろ誇りに思う。重ねて言う、私がそう胸を張れるのは君の論文『奮つて聖典原文の研究に従事せよ』だ。おかげで英国

はケンブリッジでわが生涯の大事業ができたのだと。改め君に感謝をする」と言つて雲来は頭を下げた。

才覚を縦横に応用する海旭流を貫け

海旭の胸中に衝撃が走った。初志を忘れていたわけではない。しかし、留学前もそうだったが、留学してからはとくにそうで、ついつい途次で目新しいことに目を奪われて道草を食つてしまふ。

まさに「奮つて聖典原文の研究に従事せよ」がそうだ。われながら着眼はいいのだが、それを貫きとおす持続力にいささか欠けるところがある。いっぽうの朋友雲来はひらめきでは遅れをとるが、いったんこうと決めたら貫きとおす持続力と一途さは見事というほかない。

海旭はアルザスワインをすすりながらしばし黙考していたが、やがて口を開いた。「お、おぬしに引きかえ僕ときたひには……」

雲来はまたぞろ海旭の自省の弁を見透かし

たように遮った。「何を言うか。そんな弱気な君は君らしくないぞ。酒のやりすぎではないか。君だって、ずいぶんとがんばっているではないか。もう二年も前になるかな。私が今回世話になったケンブリッジのベンドール先生から貴重な聖典の写本を借り受け、これをもとに立派な論文をものしたではないか。それに比べれば、私は古い経典を写して漢訳と照合校訂しただけにすぎん」

雲来が言っているのは、『華嚴經』の一節である「普賢行願讃」に関する論考だった。ベンドール博士からは梵字の原典の写本、日本の土川善激老師からは日本版（慈雲尊者飲光菟集の写本）、さらにロイマンからは蒙古版の写本をそれぞれ借り受け、これら三者を照合して半年足らずで洋行後第一号の論文に仕上げたものであった。（これは後に推敲を加えて海旭の学位論文となる）

「し、資料をもとに論文を書き上げることよりも」と海旭は言い返した。「ま、まずは原典にのめり込む。そして後世の原典解釈の錯

誤と瑕疵（かし）を追究する、君のそうした姿勢に頭がさがるばかりだ。まさに留学前に僕が『奮つて聖典原文の研究に従事せよ』で偉そうに唱えたのはそのことだ。ぼ、僕が言ったことをおぬしがひたすら実践しているとは、なんとも面目ないというか……」

かねて海旭は、自分のどこかに地道な原典資料との格闘に一途になれないものを感じていた。留学して三年目で、日本の姉崎正治にこんな手紙を書き送ったことを思い出した。

「例の如く『死語の研究』三昧なので面白い考も出ない、出た所が、碌（ろく）なものでもないから当今は失敬仕ることに願いたいのだ」
「死語」とは梵字のことだが、ここにも海旭の「気分」がはからずも表れていた。

会話をとぎらせた海旭を揺り起こすように雲来が声をかけた。「どうした、どうした。君のすごいのは、その才覚をあちこちに活用できることだ。皮肉でもなんでもない。それこそが渡辺海旭流ではないか。私にはとても

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)38421289

振替0018012145231

まねできぬ。ついこの間も、ロイマン先生の奥方のピアノを聞いて、新境地を得たそうだが……

「し、新境地は大げさだが」と海旭は受けた。

「さ、最近ロイマン先生が古いインド音楽の譜面を手に入れてね、いったいどんなものか奥方にピアノで弾かせたのだが、これがなかなか面白くて、文字だけおっついては得られない体験をさせてもらった」

「ほれみろ、そこが君のすごいところが、とても私には……」雲来はそこで言葉を飲み込むと続けた。

「君は大いにあちこちふらふらすればいい。私はケンブリッジの大事業でひと段落したから、『ドクトル論文』にかかるでしょう。君

が私のように一事に淫したら、それも辛気くさい原典三昧だと、かえって角を矯めて牛を殺すことになるかもしれん。それは宗門、日本仏教界のたいなる損失だ。そっちは私にはさっぱり歯がたたぬので、君にまかせる」

雲来の中には、この男は回り道をしたほうが大きなものを手に入れられるという予感があった。いっぽう海旭には雲来の一事への一途さこそ大事業をなす自分にはない『突破力』だという思いがあった。

「わ、わかった。現代の玄奘はおぬしに託するとするか」と海旭は大きく頷くと、生涯の盟友二人はしっかりと手を握りあった。

(この項つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会



●当

〈特選〉
当直の夜は虫の音に眠り落つ

石原 新

「夜は」とあるのは、普段虫の音など聞こえない町なかに住んでいるのだろう。当直の今、回りではしきりに虫が鳴いている。床の中でそれを聞きながら、次第に眠りに落ちて行く。作者はそれを楽しんでいるようだ。

〈佳作〉 名月や窓辺に休む当直医

西尾規夫

我こそは一騎当千新酒酌む

内藤隼人

秋灯や校長一人当直す

井村善也

●為

〈特選〉
ぽつぽつと野菊為朝自決の地

安藤 幸雄

平安末期の武将源為朝は、保元の乱に敗れて伊豆大島に流された後、討伐軍と戦って自決した。いま野菊の咲くその地を散策しながら

ら、為朝を偲んでいるのである。取り合わせに用いた野菊がやさしくてよい。

〈佳作〉

無為無策へくそ葛に花が咲き

斉田 仁

ハイヒール履く露草を踏む為に

野島恵美

見事なる自傷行為の柘榴かな

工藤 棹

●自由題

〈特選〉

あめんぼう寄りては離れ秋立ちぬ

吉崎美和子

いつも一匹ですいすい泳いでいるあめんぼうも、次第に命をつなぐ仕事が待っている。どこからともなく寄って来たのはそのためだ。雌に選ばれるのも大変というほかない。

〈佳作〉

境内の涌き水潔し秋の宵

飯島英徳

ひとつ穴蟹が抗う田舎道

浜口佳春

出棺の僧の衣に秋の風

近藤アツ子



誌上句会 〈編集部選〉

■当

当年は不協和音の秋の空
雨となり当惑顔の秋祭り
弁当の中身に柿の添えられて
当番の朝は糸瓜が気にかかる
朝涼し寺当番が二、三人
芸当もなきライオンや秋落暉
秋祭り当たりの太鼓響きけり
今日の日当たり蟋蟀の額ほど

當問あさ子

佐藤雅子

森 懷人

村田 篠

増田信子

加納瑠璃

鳥羽 梓

西原規夫

■為

星月夜わが為すことの儂さよ
赤い羽根前途有為な僧若し

當問あさ子

佐藤雅子

浄土誌上句会の
お知らせ

締切・二〇一四年十一月二十日

発表・『浄土』二〇一五年一月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

黒板自由題

■自由題

安曇野は麓もかすむ蕎麦の花
点鬼簿に入りし夫や秋彼岸
糸瓜忌や訪う人も疎らにて
小鳥来る社務所はビルの一階に
デパートの中の仏具屋秋うらら
秋の雲ふらふらゆけば橋がある
新涼の一筆箋に金の彩
花瓶から芒が同じ向きに垂れ
入口の混み合っている鯛雲

誰が為に鳴るや梵鐘秋の谷

お仕舞いは自分の為に胡桃割る

為にする議論の窓へ小鳥来る

当為とはゾルレン花野尽きるまで

森 懷人

村田 篠

内藤隼人

横山芙美子

當問あさ子

佐藤雅子

森 懷人

村田 篠

斉田 仁

佐々木美智子

植田天彦

後藤洋平

月島恭子

さっちゃんはネッ

かまち♡ふしろう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



カラスまで低く飛んでる野分かな 岱潤

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 蔵谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田紘義(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森巖寺)
 加藤亮哉(五反田・専修寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光園寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 真野龍海(大本山・清浄華院)
 拙 博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 (敬称略・五十音順)

今年の仏教界のブームと言えば、若い世代からの僧侶、寺院に対する改革運動ではないだろうか。松本紹圭氏と井出悦郎氏の書いた『お寺の教科書』は、彼らの行っている『住職塾』の活動と共に大きな反響を呼んだ。またお寺に三星を付けたと言われる池口龍法氏の書いた『お寺に行こう』も彼らが発行しているフリーマガジン『フリースタイルな僧侶たち』を基盤にしてこれからのお寺の方向性を明白に示した。若いそしてやる気のある僧侶たちは、春には『向源』なるイベントを宗派を超えて行い、世間から大いに

注目されている。又秋には大震災を考えたイベントを念仏仏教団という枠で行い復興の今、我々がなすべきことを問いかけた。宗教離れはもはや若い世代にとどまらず、団塊の世代や高齢者の世代にまで及んでいる。法事をするお檀家がめっきり減ったという話はもう日常的だ。今のままではお寺を維持してゆくことすら難しいという話は、これから寺院を受け継ぐ若者にとって深刻な問題だ。

若い僧侶に呼びかけた松本氏は青年会の研修会ばかりでなく、今や布教師会や普通講習会など住職たちの研修会でも引張りだこた。まだまだ一部ではあるが、僧侶たちが気づき始めている。今年は寺院そして住職の意識改革が始まった年といえるかもしれない。

僧侶とは？ 寺院とは？ そしてそのやるべきことは？ 出来れば自分自身で考えてゆきたい。(長)

編集チーフ 長谷川岱潤
 編集スタッフ 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 村田洋一

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
 メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

浄土 八十巻十一月号 頒価六百円
 昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
 印刷 平成二十六年十月二十日
 発行 平成二十六年十一月一日

発行人 佐藤良純
 編集人 大室了皓
 印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一
 東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

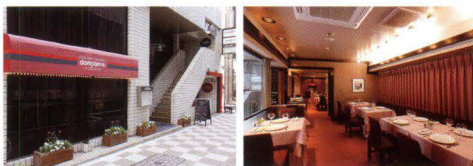
発行所 法然上人鑽仰会
 電話 〇三三五七八・六九四七
 FAX 〇三三五七八・七〇三六
 振替 〇一八〇・八二二八七

泰雲の

文と写真

美味探訪

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年



ドンピエール銀座本店【旧店名ペリニョン】

霜月になると、ともするとパラパラと時雨がくる。初時雨、村時雨、小夜時雨。茶器にもこの「時雨」と銘を持つものも多く、本阿弥光悦の傑作茶碗の一つに「時雨」の銘打つ黒茶碗があります。この光悦がもてなしについて、「客の心は我が心、甘・酸・鹹・苦・辛の五味をこえた真味、『また食べたい』と感じさせる後味をめざしてつとめる」と語っていることが伝えられています。

今回この後味が完璧なお店、『レストラン ドンピエール銀座本店』のご紹介します。

30数年銀座で、多くの人が憧れた小さなグランメゾン『ペリニョン』が、今年の3月に『京橋ドンピエール』と融合して新しいフレンチ洋食を誕生させました。

『京橋ドンピエール』時代から大ファンだったビーフカレーが、こちらでいただけると知り訪ねました。フレンチ技法を駆使して作られた特製ビーフカレーは、“旨味とコク”、そして“甘みと辛み”が絡まりスパイシーで洗練されています。また口の中とけけるような牛肉は、有名な石井ミートのA5ランクの黒毛和牛を使用しているとのことです。このビーフカレーは洋食コースの一つで、アミューズ・グール、サラダ又はスープのセットで2800円。

また、同店1階にはカジュアルフレンチ『銀座ブラッセリ ドン・ピエール』が併設され、単品でビーフカレーがいただけるそうです。

是非是非ご賞味ください。



レストラン ドンピエール銀座本店

東京都中央区銀座1-10-19 銀座第一ビル2F 03-3567-3641

営業時間 11:30~15:00(LO14:00) 17:30~23:00(LO21:00)

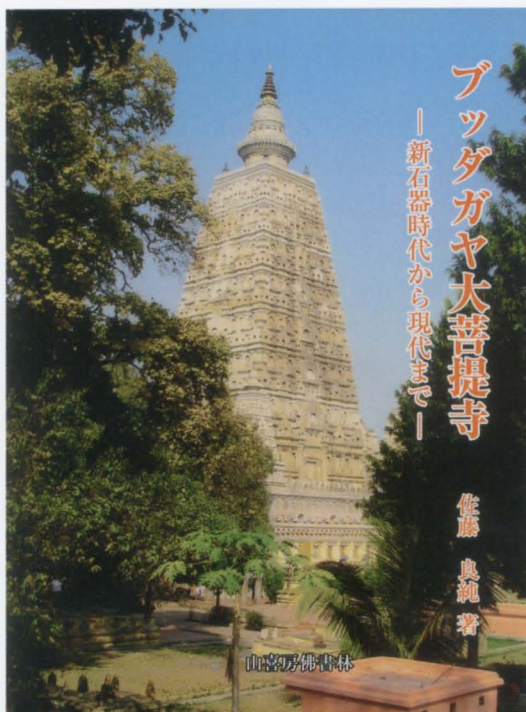
定休日 月曜日 夏季(お盆) 冬季(正月)

ランチ 5000円〜 ディナー 10000円〜 アラカルト有

大好評、在庫僅少！

ブツダガヤ 大菩提寺

佐藤良純 著



ブツダガヤ大菩提寺

—新石器時代から現代まで—

佐藤良純 著

山喜房佛書林

ブツダガヤの歴史
全貌が明らかに！

山喜房佛書林

本体2000円